

La mujer que no bajó del avión

タイトル：飛行機から降りなかった女 La mujer que no bajó del avión

著者：エンパル・フェルナンデス Empar Fernández

出版社：ベルサティル Versátil

出版年：2014

ページ数：272ページ

読者対象：一般

レポート作成：佐藤晶子

概要

ローマで惨憺たる2ヶ月を過ごしたアレックス・ベルナルは、到着したバルセロナ空港の手荷物受取所で、ほんの出来心から、持ち主が現れないまま回り続けていたスーツケースを持ち帰った。その中には、持ち主の女性で、機中で死亡したサラ・スアレスが残した手記と、遺灰の入った容器が入っていた。アレックスは、自分の人生の立て直しを図りながら、20数年前にサラがローマで犯した過ちと、その結果として不幸になる人々の物語を読み進めていく。

登場人物

アレックス・ベルナル：主人公。受け身でぱっとない人生を送る中年男性。

サラ・スアレス：50代女性。高校教師。ローマからの帰国便の中で死亡。

マリーナ・スアレス：20代女性。サラの娘。ローマのホテルの3階から落ちて死亡。

サムエル：アレックスの学生時代からの友人。

エロイ・スアレス：サラの弟。優秀な文学者だが、アスペルガー症候群を患っている。

アルド・トロッタ：ローマの大学教授で、サラの指導教官。マリーナの父親。

ソフィア：サラと同じ病院で出産した女性。ローマでサラと同居していた時期がある。

ラウル：アレックスの兄。ロサという妻と、二人の子がいる。安定しない生活を送る弟を必要に応じて支えている。

ビアンカ：アレックスの職場の同僚。アレックスが好意を寄せている。

あらすじ

アレックス・ベルナルは、魅力的なイタリア人女性に騙されてローマに行き、惨憺たる2ヶ月間を過ごした後、なんとか金を工面してバルセロナに戻ってきた。しかし、数時間遅れで到着した空港の手荷物受取所では、アレックスの荷物がなかなか出てこない。一方で、持ち主の現れないスーツケースがひとつ、何度も目の前を回っていた。

やっと自分の荷物が出てきたとき、出来心からアレックスはそのスーツケースも一緒に持ち帰る。

兄ラウルの家に落ち着いたアレックスは、空港から持ち帰ったスーツケースをこじ開け、衣類の中から、持ち主が残したノートと、遺灰の入った容器を見つけた。持ち主はサラ・スアレスという女性で、遺灰はその娘、マリーナのものだった。サラは、マリーナがローマのホテルの3階から落ちて危篤状態になってから亡くなるまでの数日間に、このような状況を招いた自らの過去の過ちについて記そうとしていた。アレックスは、友人で、以前部屋を貸してもらっていたサムエルに会い、スーツケースとその中身について語る。

生活を立て直すため仕事探しを始めたアレックスは、イタリア料理店で給仕の仕事に就く。そこで出会ったピアンカという同僚に好意を抱く。面接の帰りに寄ったサムエルの家で読んだ新聞記事で、自分が乗ってきた飛行機の乗客が機中で亡くなっていたことを知る。その乗客こそがスーツケースの持ち主であり、新聞記事の内容から、アレックスやサムエルの学生時代の歴史教師サラ・スアレスだと判明する。

サラの手記を読み進めるアレックス。若き日のサラは、向学心のある学生で、バルセロナ大学の教授の紹介で、博士論文を仕上げるためローマに留学した。しかし、指導教官のアルド・トロッタに一目会ったときから彼女の人生は狂い始める。アルドの愛情を得ることが第一の目的になり、妻と二人の子との幸せな家庭を築いているアルドが拒否しても、あの手この手を使って、ついにはアルドと関係を持ち、アルドの子を身ごもる。サラは父親がアルドだと明言しなかったが、否定もしなかったため、大学内では、アルドに対して、女子学生にセクハラをしたと根拠のない噂や誹謗中傷が起こり、アルドは徐々に精神的に追い詰められていった。サラは、「何もしない」という行為の結果、アルドが家族と別れて自分のところに来ることを期待していたが、逆にアルドはサラと距離を置くようになり、ついにはうつ病になって大学を去る。マリーナが生まれたが、アルドと連絡がつかないサラは、沈黙を破り、アルドが父親だと公言するようになる。

スーツケースの持ち主の死が記事になったこともあり、サムエルは警察に出頭すべきだとアレックスに助言するが、仕事を得たばかりのアレックスにはその勇気がない。しかしサムエルの元に警察が現れ、アレックスが在宅中にラウルの家にも警察が訪れる。アレックスは警察を避けて家を出、仕事が始まるまでの間、サラの手記を読み進める。

サラはアルドを訪問する。とある土曜日、娘のマリーナを連れて、何度か家族の食卓に呼んでもらったことのあるアルドの家を訪ねると、アルドの妻が思いがけず快く迎え入れてくれた。廃人のようになった夫に少しでも刺激になればとの思いからだったが、サラがどんなに声をかけても、マリーナを抱かせようとしても、アルドは無反応だった。帰り道、サラはローマを去ることを決意し、マリーナを連れてバルセロナの両親の家に戻る。両親や、発達障害のある弟のエロイに対しては、マリーナの父親について嘘をでっちあげた。マリーナの父親はポーランド人留学生で、妊娠したことを告げずに別れたのだと。サラが戻って2ヶ月後、ローマでサラと同居してマリーナの面倒を見てくれたソフィアが電話をしてきた。アルドの妻がやってきて、アルドが自殺したことや、その一部始終を告げ、アルドの葬儀の知らせをサラに持ってきたという。しかしサラは葬儀には出席しなかった。サラの両親はサラに代わってマリーナをかわいがり、育てた。一方で母娘の関係はずっと距離があるままだった。マリーナは父親について知りたかったが、サラは嘘をつきとおし、会うことはできないと言い張った。

アレックスが家に帰ると、ラウルが起きており、警察が来たことを告げ、理由を問いただした。翌日の12時に警察に来るよう伝言を受けたアレックスは、サラの手記を読み終えようとする。

マリーナがこん睡状態で横たわる病室に、ソフィアが訪れた。ソフィアによると、マリーナは2週間前にソフィアの家に来た。パリに短期留学に行っていたはずが、サラに嘘をついて、ローマに父親探しに来たのだ。サラの嘘から生まれた偽の父親を捜しまわるも手掛かりはなく、途方に暮れるマリーナに対し、ソフィアは、サラの指導教

官だったアルド・トロッタの妻子ならば何か知っているのではないかと考え、トロッタ家の連絡先を渡した。ソフィアは、自分のせいでこのような事態になったと語り、サラに許しを請うた。マリーナはアルドの妻と話をし、すべてを知った結果、身を投げたのだとサラは考えた。翌朝、食事をとり、今後のことを静かに考えるため、サラは一旦病院の外に出る。戻ってくると、マリーナが亡くなっていた。静けさが訪れた病室に、アルドの次男が来ていた。トロッタ家をマリーナが訪れた際、すでに妻は亡くなっており、この次男がマリーナを迎えたのだったが、彼はサラが生まれた当時幼く、何も知らなかった。しかしアルドの長男は覚えていた。マリーナの落下事故の後、長男は、父親の没落に深く関与したサラ・スアレスという女性と、父が受けた屈辱とその自殺の様子について、初めて次男に語ったという。さらに長男は、落下事故当日に、ホテルでマリーナと会って同様の話をしたが、マリーナが自分の言葉を信じず、アルドの妻が嘘をついたと言ったことから激怒し、マリーナに飛びかかったと告白した。次男はそれ以上サラに語らなかったが、兄を警察に突き出すつもりならば、その時間には兄は家にいたと証言するつもりだと言った。サラは追及するつもりはなかった。彼女はすでに、睡眠薬自殺するという決心を固めていたのだ。翌日、マリーナの遺灰を受け取り、マリーナが宿泊していたホテルの部屋を片付けた。

サラの手記はあと数行を残すのみだったが、警察で刑事と面会する時間が来た。怯えつつも関係ないと言い続けるアレックスは、空港の監視カメラが故障中で、スーツケースを持ち去った人物の画像が残されていないことや、サラの弟のエロイが、スーツケースを取り戻すようしつこく警察に連絡してきていることを知る。結局、いくつかの質問を受けただけで解放されたアレックスは仕事に向かう。そこで、ピアンカと親しく話をし、彼女への想いを募らせるのだった。

サラの手記の最後には、弟や親友に対しての言葉が綴ってあった。アレックスはサムエルとともにサラの弟エロイを訪ねることにした。インターネットで検索し、有名な文学者であるエロイのメールアドレスを見つけ、メールを送り、約束を取り付けた。訪ねた先は障害者施設で、アスペルガー症候群を患うエロイは、ここで静かに暮らしていた。会うなり、アレックスがスーツケースを盗んだ張本人だと見抜いたエロイだが、姉の手記が書かれたノートを渡されると、2日後に再び訪れるようアレックスに告げる。

翌日、仕事に行ったアレックスは、ピアンカが涙目で落ち込んでいるのに出くわす。理由を聞くと、彼氏とうまくいっておらず、一緒に住んでいる家を出なくてはならないという。行く場所がないというピアンカに、サムエルの部屋を使えるよう便宜を図るアレックスだった。

二度目はひとりでエロイを訪ねたアレックスだったが、施設の入り口で、サラのスーツケースの件で尋問してきた刑事に出くわす。刑事は、エロイが連絡してきたこと、アレックスに対する告発はされないことを告げると、立ち去った。エロイは、マリーナに父親捜しを勧め、ローマ行きの金銭の工面をしたのが自分であることを打ち明け、自分の行為が姪と姉の死を早めてしまったと語った。一方、アレックスに対しては、病気のため外出できない自分の代わりに姉の遺言を実行し、姉の遺品を整理するよう依頼し、その代わりに、姉が住んでいたマンションや車を自由に使うよう持ちかけた。思いがけない好条件の提案に同意したアレックスは、エロイの依頼どおり、手記をサラの親友に届けるが、この女性もまた、マリーナに父親探しを積極的に勧め、その死に責任を感じていた一人であった。

アレックスは、エロイから託されたサラのマンションでピアンカと一緒に住む自分を妄想しながら仕事に向かっていたが、職場の前で彼氏らしき男性と抱き合うピアンカを目撃する。

所感・評価

サラの「何もしない」という悪意は、どこにでもいる普通の人々が犯してしまいがちな過ちであり、その結果、まっとうな人々が不幸になる物語は、救いがなく、重い、読み手をのめりこませる。同時に、サラの手記を読み進めるアレックスは、受け身で、スーツケースを持ちかえたことと弟を訪ねたこと以外は大した働きのない主人公だが、その場その場の心情吐露が丁寧に描写されており、手記とともに、秀逸な心理小説となっている。サラの手記

とアレックスの語りはどちらも一人称で、そのトーンの対比も興味深い。

あらすじとは深くかわらないが、アレックスが色の名称に対して示すこだわりも特徴的だ。父親ゆずりの癖ということで、目にする色に最適な名称を付けないと気が済まないのだ。また、バルセロナやその郊外の雰囲気、アレックスが観察する人々のおしゃべりや、バルセロナの春の風物詩サン・ジョルディの日のにぎわいなど、スペインの普通の人々の暮らしを細やかに描いていて、読者は興味をそそられるだろう。

読者の意表を突くのは物語後半で、父親に会いたいと願う若い娘に便宜を図ろうとして手助けをしたのがソフィアやエロイといったサラの親しい人ばかりであり、結果として、サラがひた隠しにしていたアルドとの一件を、アルドの長男によって暴露されるどころだ。また自殺とされていたマリーナの死が、この異母兄による他殺であると匂わされるところもそれである。

試訳（第3章、31ページ12行から33ページ13行まで）

俺は世界中で一番不運な男だ、少なくとも俺にはそう思えた。さっきまで感じていた激しい暴力は自己憐憫に変わり、泣きたい衝動に駆られた。泣きはしなかった。この感情は、ため息をつく間くらいは続くだろうが、逃れるすべを知ってはいるし、ほぼ完璧にごまかすこともできる。ただ、ロサがいつ戻ってくるかも知れず、彼女に対しては、泣いているところを見られるとごまかしはきかないし、そんなことに自分の人生を賭けたくなかった。

いつもやっているように、世の中にはもっと不運な人たちが常に存在するのだと考えようとした。必ずいる。わざわざ遠くに探しに行かなくても、もっと不幸な人たちがいるのだ。現に俺のそばに、スチール製の骨壺がある。骨壺に付けられたプレートには日付とイニシャルが書かれているが、死んだ人は若く、男か、あるいは女か、24歳になったばかりだ。これこそまったくもってひどい話で、自分で金を出して買ってない無用品でいっぱいのスーツケースなんて、大したことではない、と自分に言い聞かせた。何度も何度も、10回、12回、それよりもっと、自分に言い聞かせた。納得するのが簡単でない場合もあるのだ。

数分で失望は消えた。

ロサの鍵がドアの鍵穴に近づく音がしたとき、スーツケースの中身を元に戻した。しかし閉じることができない。ちくしょう。最後の瞬間に、俺はノートを手にした。何か分かるかもしれない。ロサがエクトルをベビーカーから抱き上げたとき、俺は音を立てないように注意しながらスーツケースをベッドの下に再び押し込んだ。俺にはいつもスペースが足りない。しかし、自分の明らかな不道德の証拠を隠すもっといい方法は思いつかない。俺が使える手段は、俺の感情同様、限られているのだ。

廊下にロサがいるのは落ち着かなかったが、部屋から出るつもりはなかったので、ぼさぼさの髪を手ぐしで整えるという意味もない無駄な動作をした。

部屋にひとりきりで、芥子色のノートのほかには本もない。ここに籠城だ。

ローマ、2010年4月15日

もうすぐ真夜中だが、眠るつもりはない。眠れないだろう。看護師はわたしに家に帰ってくれと頼んできた。わたしが邪魔なのだとか知らせようとした。彼女は間違っていない。それがわたし、邪魔者、最低の妨害物、靴の中に入った小石。看護師は、わたしがいてもすることはない、休息を取るべきだと繰り返し言った。何か変化があったらすぐに電話するから、最初に連絡するから...そういったことを何度も繰り返した。母国語ではない言葉で話され

ているため、わたしが理解していないと思っている。手振りを交えて、子供に話すように大げさに発音する。この看護師は間違っている。皆も間違っている。わたし自身、わたしの原罪、最初の大きな過ちを犯してから、ずっと間違い続けている。

わたしが絶望した母親に見える人もいるだろう。何よりも娘を愛する母親に。過去を変える可能性があるなら、娘の命と引き換えに自分の命さえ差し出すような母親に。一方、ほかの人にとっては、わたしの存在は単に面倒を増やすだけで、この女から逃れたい、さまよえる亡霊のように廊下をうろつくのを止めて欲しいと思っているはずだ。

わたしがイタリア語を話せないとも思っている。

わたしは一度も口をきいていない。彼らの発言に対して、イタリア語で不自由なく反論できるし、ののしったり、ここから動くつもりはないときっぱりいうこともできるけれど、わたしはただ、椅子に腰かけ、甘やかされた子供のようにかぶりを振るだけだった。こうすれば、さらに説明する手間が省けるといふものだ。最後には、わたしに対してどんな努力をしても無駄だと考えるだろう。

病院の非常灯の乏しい明かりのもとで、近くの書店で買ったこのノートを開いている。ここに、わたしの物語を、娘のでありわたしのである物語を、マリーナの物語を書くつもりだ。この病院を去った後もしわたしに日々が残されているなら、何日か経ってこれを読んだときに、なぜわたしがここにいて、なぜ再び娘を失いそうになっているかを理解できるだろう。今回は永久に。

マリーナ...スーツケースの持ち主の娘の名はマリーナなのか。骨壺に印字されたイニシャルのM. S. R.とも一致する。年齢も合いそうだ。自分よりも不幸な人間というのがいるものだ。これは例外なしの法則だ。だが、そう考えたところで、気が楽にはならなかった。ひとりの女性が早死にしたって分かったところで、俺にとってどんな慰めになるというんだ。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/la-mujer-que-no-bajo-del-avion>